
山と老人と

遊佐ひろみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

山と老人と

【コード】

N9985G

【作者名】

遊佐ひろみ

【あらすじ】

山に生きた老人と、その老人を二十年振りに訪ねた『僕』と友人Kの話です。

山と老人と

朝あさや焼けに見る駒ヶ岳は、我々登山客の足を止めた。祈る者があつた。眼鏡を白くさせながら、厳しい目が見守つた。山と死そのものを結び付けて考えてきた日本人の着想が、今ここに明かされる思ひだつた。

僕と友人のKとは、肩越えの大荷物を背負い、重い厚底の長靴を踏んで、雪の伊那谷いなだにを渡つていた。朝は足もとの暗い時分じぶんから登り始め、寒い、小雨まじりの風が、しきりと僕の眼鏡を曇らせたがつた。二人は大きな眼をあきながら、頭上をさえぎつた白樺しらかばの枝越しに、暗い山にただ一つ、赤い炭焼きの火の動いているのを意識し合つた。それから退屈な枝踏みと岩登りの連続だったので、朝焼けを済ませた伊那谷を渡る頃には、Kは何か大声に叫んでしきりに残雪へ倒れた。

「汚れた。」

「冷めたくて上々うへうへ……君もやつて見たいだろう。」

Kは枯枝やら腐植土やらを乗せた雪の上をまるで氷の寢床のように寝そべつた。僕は小脇の比較的さっぱりした雪の上へ腰を下ろした。

「損だな君みたいなのは。」

それでも実さい汗を流した服の上ではKの顔の気持ちの良さそうなのには違いなかった。

「ここで露營したら、さも愉快だと思わないか？」

「無茶だ。一応この下には水が走ってる、崩れれば死

。早く

ヒュッテへ登つてしまおう。」

「また青山ヒユツテか。君は先日から何でも憑かれたみたいに。」

「……………」
「まあいい。もう足腰が楽になった、次々に登れば文句はないかい？」

青山ヒユツテとは、僕とKとが八つか九つの時分に来た以来、つまり二十年という歳月を経て二たび世話になる事となる。

それは駒ヶ岳の六合目と七合目との平坦な草本帯に建てられ、多く水芭蕉を裏庭の浅い池塘せうとうに持った、一棟の丸太小屋で、稚児車ちんくるまの紅葉と同色のどぎつい赤屋根は、濃い霧の一日、暗い雨の午後にあつても、キリツと登山客の眼を惹いた。

「おいおい、いま谷の上には赤屋根が見えただろう？ ほら、あそこへ立てよ、そこからでは岩の根しか見えまいよ。」

辺りは一めん明るい大斜面が続いて、そこを歩く人影のわずかなのも、谷から飮する人声のうつすら響くのも、妙に僕たちを寂しくさせた。そうしてただ吹きっぱなしの強い風ばかりが、はるか上空を鳴っていた。

僕らが谷上の青山小屋を間近に歩いていると、中から八つくらいの色黒の娘が、弟の手を引いて、さも頼もしそうに僕の小脇を歩き過ぎた。弟の方は咳ばかりして少し気になった。その出払った玄関の足場には、白っぽい花崗岩かこうがんを細かく積み重ねた、他とはちよつと段違いの石高いしだかに造つてあつた。

Kは物珍しげに、ぶ厚い窓掛に仕切られた硝子戸の奥を、額髪ひたいがみをつぶして覗き込んでいた。

「誰かがいるのかい。」

「犬が一匹。」

「犬？ 人はいないのかい。」

するとそこへ僕らを不思議がった老人が一人、木道もくどうをコトコト鳴らしながらやって来た。さらにその顔のどこにも、僕らが二十年間記憶の内に親しんだ青山ヒユツテの主人の面影が見あたらなかった。

むしろ二人は大いに別人だった。したがって僕らは山小屋に新たに雇われた一人であろうとこの老人に一瞥いちべつを加えた。

「何かと思いました、御用ですか。」

老人は、桃色の鈴を垂らした岩櫛いわはせの花を鉢に入れて、それを秘宝か何かのように大切につかんでいた。

「中へ入って休むには。」

「待つてください、いま人を呼びますから。」

日に焼けた、眼の大きい、白い顎髭あごひげのあるこの老人は、六、七十の年寄りとは思えないほど、前後の事がはつきりしていた。

僕とKとはやはり同じ日の昼に、二十年の歳月を経て青山ヒュッテに荷物を運び入れる事が叶った。

屋根の低い割に天井の高い、黒ぐると煤ぼけた屋内には、僕の記憶と一致しないところは一つもなかった。暖炉と薪暖房とが日の日ひ中でも別々に火を焼くべられている光景さえ変わるところがなかった。段々と駒ヶ岳から雲の立ち去る窓の眺めに僕らは肩を並べながら、ここへ一夏の長滞在をしていた頃のうる覚えなどを口に出し合った。

「あなた方は、そうですね、ここへ来た経験がありません。」

奥から熱い珈琲コーヒーを盆の上に乗せて来た老人は、中央に据えた切株形のテーブルの上の一つ、後の二つを暖炉に挟み合って坐った僕とKとに手渡した。

「小さい頃に登って参りました。」

「ああ成程、やはりこの座り方にどこか初めて来た方には見られないような、しかしどことなく一口に言えないような、勝手を知った様子があると思って、先程から眺めておりました。」

老人は自らも暖炉の近くに座と取りながら、日に黒ぐると焼けた顔を僕とKとに互がわりにねじ向けて思うまま笑った。ぽつりぽつりと言葉を交わして行くと、老人は何でももう五十年前からこの山小屋の主人を務め上げているとの事だった。

「今季までなんですな。私は世間様を裏切るも同然で、山の上ばかり生活してきたものですから、朽ち果てた時などは、骨を山頂

に撒まいてもらおう、そういつつもりになって今まで生きて来ました。ところが、ほら、あなた方ともよく遊んでいた、あの湊はなの垂れた孫娘が、まあ今年やっと片付くというので、倅せがれたちが首に縄をつけてもって、鼻息も荒く来月には必ず登って来ますて。」

青山ヒユツテの標高は二メートルに近い高度を保ち、夏でも氷柱ついでが出来そうな風が吹きつけた。それらが黒い湿原の水面に大きな輪を広げながら、一斉に頭上の雪峰を目指して走って行く風情は、誰の胸をも荒涼うつつやと打った。

二十年。主人の重く老い凋しぼんだ姿には、僕らを残酷なほど寂しくさせるすさまじい力があつた。すばしこく逃げる僕とKとの襟首を大声を張り上げて打ち寄せた、あの山のような威厳は、いま間近で老眼鏡をつねり新聞に親しむ老人には、決して見いだす事ができなかつた。

僕らは子供の頃から考えればわずか二日ばかりを青山ヒユツテに過すごして下山した。

それから幾日かが過ぎた。ちょうど僕と姉婿あねむことが徳利を傾けながら雑談に耽たっていた六月十五日の夜、妻が次女を叱り、泣かせた後で出た電話口が、わりと静かになった。首を伸ばして姉婿越しに見ていたその背中が回ると、「あなたあなた」と言つて妻が小走りを使って僕の耳に口びるを押し付けた。電話はKからで、先々に青山ヒユツテの主人が屍体となつて駒ヶ岳から下山せられたという報告せだつた。床柱に寄り掛かつてこちらを眺めていた姉婿は、自分の義弟の急の浮き沈みの烈しさに強い気掛かりを感じているらしかつた。僕はただ「そうか」と言つたぎり、窓を睨にらむようにして降り始めた雨の音を聞いていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9985g/>

山と老人と

2010年10月8日15時11分発行